＜実践報告＞

保育者養成校に於ける文化的活動についての一考察

落　合　知　美

A Study on Cultural Activities in Childcare Training Schools

OCHIAI Tomomi

キーワード：幼児の感性、ミュージカル、文化的活動

はじめに

保育者養成校においての文化的活動の意義とは、どのようなものであるのか。そのためには、どのような準備が必要となり、保育者養成校としてどのような変遷を辿ってきたのかを、ここでは検証した。文化（culture）という言葉は、芸術や文化の産物としての意味合いとして言われるということはもとより、人間が社会の一員として振舞ったその者の総体として使われている。総体として使われている以上、文化には多くの意味合いがある。又、文化という意味のラテン語は、cultura であり、耕す・手がけるという意味である。“文化的活動”を行うためには、その題材をより深く掘り下げる必要があるのではないだろうか。

1．文化的活動へと繋がる「表現」を目指して

本学（埼玉東萌短期大学）では、平成 23 年、24 年、25 年、26 年と、「保育内容（総合表現）指導法」の授業において、ミュージカル“サウンド・オブ・ミュージック”を取り上げた。本学は、平成 23 年（2011 年）開学である。それ以前は、指定保育士養成施設（東萌保育専門学校）であった。教科名は「音楽Ⅲ」であったが、無論「表現」の授業も行っていた。筆者は、専門学校で 1 年間、「音楽Ⅲ」の授業で、ミュージカル“サウンド・オブ・ミュージック”を取り上げた。それは、「音楽表現」の授業であったからである。将来、保育者になろうとする者には、人としての数々の資質が必要とされる。その数ある資質の中でもとりわけ、“感性”というものが大切であろうと、筆者は考える。“感性”とは、（Sensibility）①外界の刺激に応じて感覚・知覚を生ずる感覚器官の感受性。②感覚によってよび起こされ、それに支配される体験内容。従って、感覚に伴う感情や衝動・欲望をも含む。③理性・意思によって制御されるべき感覚的欲求。④思惟の素材となる感覚的認識[1]とある。端的に言えば、外界からの刺激を直感的に印象として読み取り、そして感ずる能力である。そして保育者は、幼児の感性や創造性を豊かにするために、自身が、表現力を身に付けることを必要とされるのである。つまり幼児の表現を支えるための感性が、必要なのである。そして“感性”を磨くためには、保育者自身が多くの感性を磨くための経験を積まなくてはならない。“感性”とは、日々の生業の積み重ねによって形づくられるものであり、昨日今日行ったから直ぐに身に付く、又は磨かれたというようなものではない。感性には、磨くという言葉が使われる。そして、磨くという言葉が使われている以上、一筋縄ではいかず、ある一定以上の時間がかかることは必至である。

2．文化的活動の第一歩

本学が、開学以前の東萌保育専門学校であった平成22年、「音楽Ⅲ」の授業において、初めてミュージカル“サウンド・オブ・ミュージック”を行った。それは、夏休みを挟んだ全15回の授業であり、15回目の授業内での発表となったが、16名全員がとても生き生きと演じており、出演した学生たち16名全員が、卒業前の良い思い出となったと言っていた。

その後は、埼玉東萌短期大学開学後、平成23年（2011年）度、平成24年（2012年）度、平成25年（2013年）度、平成26年（2014年）度に、保育内容「総合表現」の授業で、ミュージカル“サウンド・オブ・ミュージック”を取り上げた。本学の授業内で取り上げたミュージカル“サウンド・オブ・ミュージック”は、足掛け5年の月日を費やした。保育者養成校の授業が、文化的活動の第一歩となったのである。授業の到達目標として、①保育者として、子どもと伴に楽しく舞台発表（表現）ができるようになる。②表現活動を通して、「表出」ではなく積極的な気持ちの表し方である「表現」を実感し、保育者自らの感性を育むとした。学生たちは、感性を育むことが出来たか否かを、検証してみた。

3．ミュージカル“サウンド・オブ・ミュージック”

そもそもミュージカルとは、20世紀前半の英語圏で舞台芸術を代表とするものであり、そしてそれは教養あるミドルクラスの劇場体験として成熟してきたいわば、舞台劇である。ミュージカル“サウンド・オブ・ミュージック”は、1959年ブロードウェイで初演された。作曲は、リチャード・ロジャース、作詞がオスカー・ハマースタインである。このミュージカルは、公演回数も4000回近く行われ大成功を収めた。そしてこのミュージカルの発展に欠かせないのが、映画というメディアの発展である。映画版は1965年に、ロバート・ワイズ監督によって作られた。

“サウンド・オブ・ミュージック”は、修道女マリアが主人公である。マリアは天衣無縫な性格であったが、修道院長に命じられ、オーストリア海軍の大佐の7人の子どもの家庭教師として赴任する。初めは子どもたちも警戒をしていたが、徐々にマリアに心を開いていく。やがて、その物語は、大佐とマリアのロマンスへと発展していく。だが、時は第二次世界大戦まっただ中であり、ナチスドイツに協力を強いられた大佐一家は、音楽祭の最中、オーストリアから脱出。スイスへと亡命し、その後平和に暮らすという実話に基づいたストーリーである。

4．“サウンド・オブ・ミュージック”採用の理由とは

保育者養成校では、「表現」の授業において、“感性”が取り上げられている。“感性”を磨くため、保育者養成校では、何を行えば良いのか。保育所保育指針（平成20年3月）では、表現とは、感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする、とある[2)]。従って保育者は、幼児の表現を支えるため、自らの感性を豊かにする必要があるのである。そこで、筆者が何故ミュージカル“サウンド・オブ・ミュージック”を感性を磨くための教材として取り上げたのかを、述べる。

①主人公が、完璧な人間ではないこと。そして、最後には幸せになっていくストーリーである。学生たちは、主人公マリアが遅刻をし、天衣無縫であることに親しみを持つであろうと思われる。より親しみを持つことにより、物語に入り込みやすい。そして、自らの人生を重ね合わせたくなると考えられる。

②歴史的背景の醸し出す、緊張感そしてクライマックス。楽しいハッピーエンドであるかのごと

く、１幕目が終わった後に、第二次世界大戦による家族が引き裂かれてしまうかもしれない試練が襲い掛かる。一家はナチスドイツに捕まるかもしれないという危機感を醸し出している。

③子どもが７人存在し、各々個性に溢れていること。

保育者養成校の学生は、子どもが好きであると考えられる。登場人物は、個性的な子どもが７人もいるので、役に入り込みやすいと推測できる。

④若い娘の恋愛物語と、大人の恋愛物語がミックスされていること。年頃の学生たちは、恋愛物語が大好きであり、興味もある。

⑤挿入歌が、名曲揃いであったこと。

名曲「ドレミの歌」など、数々の名曲が胸をうつ。又、本格的に歌を勉強したことがない者にも歌いやすい歌が大半である。（例外：修道委員長の歌う「Climb every mountain」は、音域と曲調のダイナミズムにより、歌唱力が必要とされる。）

⑥登場人物が、ちょうど15名前後に設定されているので、クラス編成上適切であったこと。

１クラス（40名）を、半分に分けて、２公演とし、お互いの違いを学び合うことができる。そして、全員に役を付けることができる。

⑦自然の中、豪華な屋敷、修道院などの舞台背景の展開があること。

舞台背景や、大道具・小道具など工夫し、学ぶことができる。

⑧主人公が女性であること。

保育者養成校の学生は、殆どが女子学生であるため、感情移入しやすい。

⑨実話であったこと。

このミュージカルの原作は、1949年にアメリカ合衆国で出版されたマリア・オーガスタ・フォン・トラップという尼僧から男爵夫人になった人の回想記「トラップ家合唱団物語」である。

⑩IOT教材としての、可能性。

昨今、IOT教材の普及は、著しい。このミュージカルもＤＶＤとなっておりさらに、インターネットからこの実在の合唱団の今を知ることもできる。

これからのIOT教材への可能性を感ずる。

⑪総合的に見て、「保育内容（総合表現）指導法」に適している。このミュージカルは、誰もが知っている有名な作品である。

５.「保育内容（総合表現）指導法」での試み

学生たちは、総合性を兼ね備えた“表現”である、「保育内容（総合表現）指導法」の授業にて、ミュージカル“サウンド・オブ・ミュージック”の上演を試みた。幼児と表現科目の、全体目標として、領域「表現」の指導に関する、幼児の表現の姿やその発達及びそれを促す要因、幼児の感性や創造性を豊かにする様々な表現遊びや環境の構成などの専門的事項についての知識・技能・表現力を身に付ける[3)]とある。将来、人間形成に携わる職業に就く以上、保育者はすべてをバランスよく取り入れ、自らも“感性”を磨かなくてはならない。又、認定こども園、保育所、幼稚園等では、子どもの「お楽しみ会」を毎年行うことが恒例となっている。その際、自らが舞台を行ったことが経験となり、役に立つのである。

第１・２週目授業では、学生たちに自らこのミュージカルを演じるという自覚を促す意味で、粗筋を書かせた。学生たちはICTを利用した画像を見て、再度内容を把握することが求められた。

第３週目授業にはクラス（40名）を半分の20

名に分け、前半組・後半組とした。そして、各組の配役は各々が適役となるように、教員が行った。又、各組には、それぞれ脚本家・演出家を配置した。脚本家は、映画の筋書きを基に、45分間で収まるミュージカルとなるように台本を書き上げた。

Sound of Music発表までの活動について

○ 12月25日（火曜日）のタイムスケジュールについて

Aグループ（吉田・鷲巻）

14時50分 15時00分	10分 20分 30分	40分 50分 16時00分 10分
出席確認、申し送り	曲「Sound Of Music」の歌練習（修道女以外全員）（P.犬飼）※クリエーティブホール	立ち位置、セリフ確認（全員）※クリエーティブホール
	曲「マリア」の歌練習（修道女）（P.落合T）※落合Tレッスン室	※1 リーズル、ロルフは出番以外は、落合Tレッスン室でもうすぐ17歳の歌練習※落合Tレッスン室 ※2 修道女は出番以外、「マリア」の振り付けを考案する※空いてる場所

Bグループ（津原・西山）

14時50分 15時00分	10分 20分 30分	40分 50分 16時00分 10分
出席確認、申し送り	曲「Sound Of Music」の歌練習（トラップ一家）（P.犬飼）※クリエーティブホール	劇「一人ぼっちの羊飼い」練習（マリア＆子どもたち）（P.犬飼）※音楽室
		曲「エーデルワイス」「もうすぐ17歳」歌練習（トラップ、リーズル、ロルフ）※落合Tレッスン室
	曲「マリア」の歌練習（修道女＋マックス、エルザ）（P.落合T）※落合Tレッスン室	曲「マリア」の振り付け考案（修道女＋マックス、エルザ）※空いてる場所

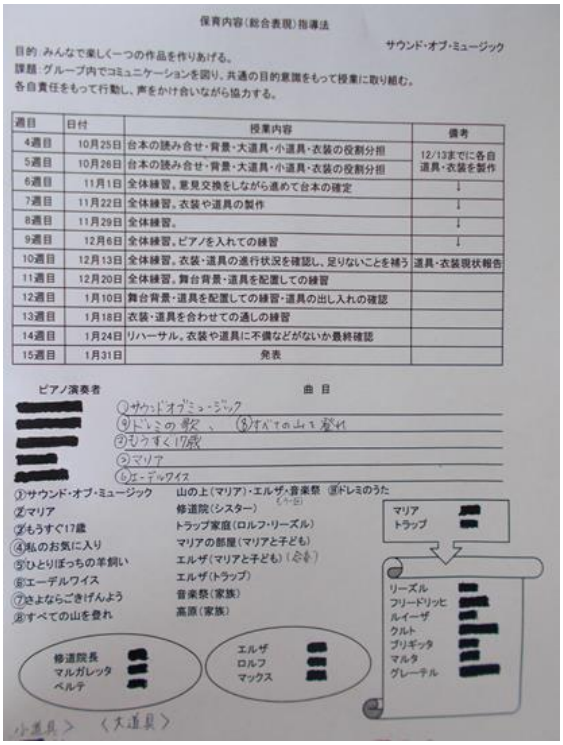
○ 授業外の練習スケジュール（案）について

▼ 1月9日（水）、11日（金）、16日（水）、18日（金）、23日（水）、25日（金）の4限目（14時50分～最長16時20分まで）

⇒ 活動は主に芝居練習や小道具製作。

▼ 1月22日（火）16時20分～は翌週発表グループのリハーサル。
1月29日（火）16時20分～は残グループのリハーサル。

写真１　班ごとの活動内容



保育内容（総合表現）指導法

サウンド・オブ・ミュージック

目的：みんなで楽しく一つの作品を作りあげる。
課題：グループ内でコミュニケーションを図り、共通の目的意識をもって授業に取り組む。
各自責任をもって行動し、声をかけ合いながら協力する。

週目	日付	授業内容	備考
4週目	10月25日	台本の読み合せ・背景・大道具・小道具・衣装の役割分担	12/13までに各自道具・衣装を製作
5週目	10月26日	台本の読み合せ・背景・大道具・小道具・衣装の役割分担	
6週目	11月1日	全体練習。意見交換をしながら進めて台本の確定	↓
7週目	11月22日	全体練習。衣装や道具の製作	↓
8週目	11月29日	全体練習。	↓
9週目	12月6日	全体練習。ピアノを入れての練習	↓
10週目	12月13日	全体練習。衣装・道具の進行状況を確認し、足りないことを補う	道具・衣装現状報告
11週目	12月20日	全体練習。舞台背景・道具を配置しての練習	
12週目	1月10日	舞台背景・道具を配置しての練習・道具の出し入れの確認	
13週目	1月18日	衣装・道具を合わせての通しの練習	
14週目	1月24日	リハーサル。衣装や道具に不備などがないか最終確認	
15週目	1月31日	発表	

ピアノ演奏者　曲目

①サウンド・オブ・ミュージック
②マリア
③もうすぐ17歳
④私のお気に入り
⑤ひとりぼっちの羊飼い
⑥エーデルワイス
⑦さよならごきげんよう
⑧すべての山を登れ

山の上（マリア）・エルザ・音楽祭（ハ～ロ）　⑨ドレミのうた
修道院（シスター）
トラップ家庭（ロルフ・リーズル）
マリアの部屋（マリアと子ども）
エルザ（マリアと子ども）（会話）
エルザ（トラップ）
音楽祭（家族）
高原（家族）

マリア
トラップ

リーズル
フリードリッヒ
ルイーザ
クルト
ブリギッタ
マルタ
グレーテル

修道院長
マルガレッタ
ベルテ

エルザ
ロルフ
マックス

小道具＞　＜大道具＞

写真２　各週のスケジュール

２年生最後の授業であった「保育内容（総合表現）指導法」の授業は、各組の演出家が主導となり、スケジュール管理も自分たちで行った。だが、すべての学生たちがこれらのことをすべて取り仕切ることは難しく、その都度教員が指導をした。その際には教員主導の形を取るのではなく、学生主導の形に持っていくことが、学生たちの満足度・今後に繋がると考え、指導を、学生たち自らが考え、工夫できるものとした。そして、２年生最後の授業として感動の中発表を終わったのである。本授業ミュージカル“サウンド・オブ・ミュージック”は、すべて脚本から演出、大道具・美術・オーケストラ（ピアノ）・歌・セリフ・舞台・照明・衣装等すべての舞台に関することを、学生自らが行ったのである。教員は、表現を総合的に捉え筋道を立て、学生の疑問に思う所に答え、ポイント・ポイントでの演技指導・歌唱指導・演奏指導等を行い、学生の自主性を尊重することに努めた。半年後には、保育現場での何れかの役目を担う学生たちへの過度な手助けは控えなくてはならない。以下、授業「保育内容（総合表現）指導法」において、最終授業終了後の学生たちのアンケートの一部を記載する。

６．学生たちの感想

・日にちの少ない中、人数の少ない中、授業外で集まり、何時間も授業外で練習をした賜物です。本番は楽しく終われて良かったです。
・最初はやる気があまり感じられなかったですが、少しずつモチベーションが上がり、終始みんな楽しそうにしてくれました。
・役がやりたかった気持ちもありますが、サポートできて良かったです。（演出担当）
・初めて自分たちで劇すべてを作ることはとても大変で、出来るのか不安でもありました。しか

し徐々に絆が生まれて、みんなで協力し合うようになっていきました。２年間の最後の授業で、クラスのみんなと一体になれて一つの作品を作り上げたことは、とても良い経験になりました。この人と人との関わり、協力し合うこと、今後に生かして子どもたちに少しでも伝えられるように、頑張っていきたいと思います。（シスターベルテ役・大道具・美術）

・僕は２役で、前半・後半で演出家の求めるものが違い、又練習も多くて大変でしたが、その分やりがいもあり、練習も含めてとても楽しかったです。それぞれが与えられた役割を充分に頑張って一つのことをした達成感は、とても良い経験になりました。（トラップ・ロルフ役）

・本当に、本当に緊張しました。セリフも本当に飛びました。でも、みんなで１つのものを作るって本当に素敵だと思いました。終わってしまうのが、さみしいです。（院長役、大道具）

・練習では何度繰り返しても上手くできなかったことも、本番では笑顔で楽しく演じることができました。ベンチが出てなくて焦ったけど、アドリブもできたし、セリフも間違わなかったので良かったです。（リーズル役）

・脚本・演出が素晴らしくて、私もやり易かったです。みんな団結していて素晴らしい。（子役）

・今回の作品は、自分たちだけで本当に大丈夫かなと思ったが、見事に今日大成功することができました。週２・３回は練習して、自分では本当に一生懸命に取り組んできた。だが、時には辛くて辞めたいと思ったが、皆のサポートもあり、最後までできた。本番は緊張をとてもしてしまい、移動を間違えることもありました。しかし最後はたくさん泣いて、たくさん笑うことができた。サポートしてくれた人に感謝。最後の授業が“サウンド・オブ・ミュージック”で良かったです。（フリードリッヒ役）

・一致団結できた！感動！（ブリギッタ役）

・準備期間は、合わせるのも少なく通しも間際になり、正直不安でした。しかし、皆の協力と脚本家・演出家の方々のおかげで大変素晴らしい劇になりました。泣きました。この感動を忘れません。（大佐・ロルフ役）

・初めは、なんでこんなことやらなきゃいけないんだろうと、嫌でした。初めの数回は練習も休みました。でも、セリフや流れを覚えるごとに、チームのみんなが愛おしく思え、マリア役が本物のマリア・母親に感じ、兄弟も、本物の兄弟に感じ、大佐も父に感じ、毎回夜の７時迄朝練も集まって練習をする意味がわかりました。歌も本当に楽しく、楽しい時に歌うと、こんな気分になるんだなと思いました。音楽は、ピアノだけではなく、このような伝え方、感じ方楽しみ方があるんだと知ることができました。（フリードリッヒ役）

・本番に至るまでは、ここまで本格的なものだとは思っていなくて、最初の頃は、みんなの言う通りにするだけだったりしたが、日にちを重ねていくうちに、毎日歌や役の練習をしていくうち、中途半端な気持ちは無くなり、本番はとても感動したし、達成感で一杯でした。皆が頑張っていたのも知っていたので、余計泣きました。素敵な思い出になりました。（シスター役）

・どのようにすれば、身長が小さくても長官らしくなるのかをずっと考えていました。ですがそのままでよいと言われたので、ちびっこギャングになるつもりでやりました。本番になったら自信を持ってできた気がして、良かったです。（ツェラー長官役）

・初めは、ミュージカルをやると聞いて、私は目立つことが苦手でやりたくなかったです。でも練習を重ねていくうちに、練習が楽しくなりました。本番は緊張しませんでした。「やったー」私をグレーテルに選んでくれて、ありがとうございます。（グレーテル役）

・とっても、とっても楽しかった。授業外の練習もたくさん参加して、グループの団結が深まり楽しくできた。「表現」することって素敵。

・脚本を、覚えやすく、かつストーリーを変えないよう、配慮して書いた。又、演出家と一緒に具体的な動きや小道具を考えるのは楽しかっ

た。本当にこの授業は苦しみました（笑）。夢で魘されました（笑）。しかしコミュニュケーションの大切さを感じました。勇気をもって積極的に動けるようになりました。稽古に参加をしない人など、良いことばかりではなかったが、これからまた社会に出て働いたときに、この舞台が自信になると思いました。（脚本担当）

・７人兄弟に選ばれたことで、プレッシャーを感じていた。皆に負担をかけないために、練習には全部参加をするよう心掛けた。練習を重ねるごとに自信がついてきて最後にはまとまりがあって、チーム力が出てきた。そして、完成度、達成感がすごかった。（クルト役）

・最初は授業の一環として仕方なくやる気持ちでしたが、全体が終わり記念写真を撮った瞬間、２年間が走馬灯のように思い出され、涙してしまった。感動した。（ロルフ役）

・最初は、できるかどうか不安であったが、皆に負担をかけないために、練習にはすべて参加した。最後はみんな一致団結できてよかったです。（ブリギッタ役）

７.「保育内容（総合表現）」指導法の授業から得たもの

幼児と表現の科目において、全体目標には、領域「表現」の指導に関する、幼児の表現の姿やその発達及びそれを促す要因、幼児の感性や創造性を豊かにする様々な表現遊びや環境の構成などの専門的事項についての知識・技能、表現力を身に付けるとある。本学での授業「保育内容（総合表現）」指導法は、ミュージカル“サウンド・オブ・ミュージック”を題材として行われた。この題材は、全体目標である幼児の表現遊びや、環境の構成などの専門的事項についての知識・技能・表現力を身に付けるには、適していると考えられる。ミュージカル“サウンド・オブ・ミュージック”の中には、子どもの表現遊びのシーンがあり、学生たちはこのような遊びがあるのかと知ることができる。そして環境の構成などの専門的事項についての知識・技能・表現力は、ミュージカル“サウンド・オブ・ミュージック”を演じることにより、学生たちは充実感と伴に、自然と身に付けることができたのである。

８.「総合表現」指導法授業から、文化的活動へ

本学では、足掛け５年に渡り、ミュージカル“サウンド・オブ・ミュージック”を行った。それは、音楽Ⅲの授業内で行い、「保育内容（総合表現）指導法」の授業内と、すべてが、学内の学生又は教職員対象の公演であった。しかし今回は、更に一般の人々に見て貰える文化祭での公演に挑戦したのである。文化的活動とは、文化の本来の意味である耕すこと（つまり長く・深く掘り下げる）ことが大切である。幼児の表現活動に必要な“感性”を培うために、そしてその“感性”を保育者自らが身に付けるために、本学では６年もの歳月を経てミュージカル“サウンド・オブ・ミュージック”を温めてきた。本学には、開学と同時に立ち上げた学生たちのクラブ活動の一つに“音楽サークル”がある。１期生より続くサークルの１つであり、その火を絶やすことは、慚愧の念に堪えない。今年度部員数は、２年生２名、１年生２名である。今年度の学園祭（東萌祭）で、何かを発表しようとサークルで話し合ったが、人数の関係もありなかなか良いアイディアが浮かばなかった。そこで、以前より、公に学内の“サウンド・オブ・ミュージック”を発表することを考えていた筆者が、この試みを提案した。クラブの部長は、人が足りないことに不安を感じていたが、教員が歌の上手な学生たちに声をかけた。部長と、副部長で台本を書き、日々の練習が始まった。初めは、一人ずつ声をかけていった状態であったので、本格的な練習は、１か月前からとなった。しかし、頼んだ学生の中には、当初「やります」と言っていた学生が、学園祭（東萌祭）の重要な係になってしまったり、リーズル役を頼んだ学生も、家人が入院・手術になってしまい急遽できなくなったりで、人員確保には苦労をした。しかしその度、気風の良い学生が、代役として立つことを承

諾してくれた。このような学生がいるということは、本学の強みでもある。公の場での公演ということで、“サウンド・オブ・ミュージック”を行うことは、簡単ではなかった。それは、ミュージカルという性質上、歌を歌うということがセリフ以外にも入るため、歌の上手な学生が望ましかったという理由である。

更に、オーケストラ伴奏を、ピアノで行う以上、ピアニストはプロをお願いすることとなった。しかし、２日間の内、１日しか都合がつかず、あと１日は、急遽ピアノの弾ける卒業生が担当をしてくれた。更に、音楽サークルの１期生の卒業生や、３期生の卒業生も参加をしてくれ、在学生にとっては掛け替えのない思い出と、同時に勉強になった。例えば、卒業生が、見事な舞台セットを、フリーハンドで作成している様子を在学生は見、勉強になった。卒業生は、現役の保育士をしており、仕事の合間に後輩たちのため、練習に参加をしてくれた。又、男子学生が不足している状況もあり、マックスおじさんの役は、本学の男性教員が担当した。文化祭での音楽サークル発表“サウンド・オブ・ミュージック”は、在校生・卒業生・教員の参加による舞台発表となったのである。そして迎えた本番の日、学生たちは、ありとあらゆる困難に打ち勝ち、見事全２公演を一般の人々の前にて演じ切ったのである。終了後の学生たちは、充実感に溢れており、これを機に、音楽サークルへの入部者が増加した。

９．文化祭で“サウンド・オブ・ミュージック“を演じて

学生たちは、以下の感想を持った。

・終えてみて、またやりたいと思いました。
・ソロで歌うのは（舞台で）初めての経験でしたが大らかで、皆それぞれの力を信じていることに、とても救われました。
・自分は、心から自然に演じられることを願っていました。本番は（特に１日目）緊張から固くなってしまいました。でも、皆の励ましで助けてもらいました
・代役で不安でどうなるのかと思ってたけれど、大変な中にも楽しさがあって、一緒にできて良かったと思っています。
・次回はもっとエルザの役をしっかりと理解してやってみたいです。
・ミュージカルの楽しい所を知れたのでもっと色々な作品を知りたいと思いました。
・短い日数、短い時間の中で全員がイメージを統一、共通目標をはっきりして練習に取り組んだからこそ、完成度を高めることが出来たと思う。
・OB,OG の先輩方の助言・協力がとても助かった。経験者だからこそ分かる問題点や改善点な

写真３　マリア役の学生

写真４　歓迎シーン

写真５　歌「私のお気に入り」

写真６　「クック―」

写真７　グレーテル役　学生　終了後シーン

写真８　クルト・フリードリッヒ役　学生　終了後

写真９　リーズル・ロルフ役　学生　拍手を浴びて

写真 10　修道委員長役　学生・シスターマルガレッタ役　卒業生

写真 11　全員　拍手

写真 12　舞台終了カーテンコール

ど、指摘して頂いた。
・大勢の観客を目の前にし、緊張感漂う中、練習の成果を発揮し、大きな拍手や賞賛の声を、頂くことが出来た。
・一人ではない、皆が一緒だという仲間意識が支えとなってくれた。
・最初先生からお話を頂いた時、出来るか不安でしたが、舞台経験が無い人でも、楽しく出来ました。
・来年、もう一度この舞台をやってみたい。
・この思い出は、短大生活一番の思い出になると思います。

まとめと今後の展望

保育者は、幼児と表現の科目において、全体目標が掲げられている。領域「表現」の指導に関する幼児の表現の姿やその発達及びそれを促す要因、幼児の感性や創造性を豊かにする様々な表現遊びや環境の構成などの専門的事項についての知識・技能、表現力を身に付ける、とある。

中でも、（１）幼児の感性と表現（２）様々な表現における基礎的な内容があり、その目標は、身体・造形・音楽表現などの様々な表現の基礎的な知識・技能を学ぶことを通し、幼児の表現を支えるための感性を豊かにする、とある。感性を豊かにすることが、求められているのである。学生たちは、ミュージカル“サウンド・オブ・ミュージック”を授業、そして文化祭で演じ切ることができた。授業だけではなく、学生たちは学園祭（東萌祭）という文化的活動を通して、より多くの様々な人々と接し、より大きな緊張そして感動を体験することができた。更に、その“文化的活動”に至るにあたって、５年間の長きにわたり、一つの演目を掘り下げることができた。このことは、学生たちの自信に繋がり、今後の保育者としての未来に影響を与えた。そしてこれは文化的活動という観点で言うならば、只１回のこととしてではなく、より深みを持って再演し、学生たちの感性の磨きへと繋がっていけるようにすることが、今後の課題である。今回は、声楽的な見地が、不足していたように思えたので、再演した時には、より深く掘り下げより精巧な演目として行いたい。何故ならばそれこそが、文化的な意味合いを強くしていくものであると考えられるからである。

注

掲載写真すべてにおいて、学生諸子よりインフォームドコンセントを得ている

平成 23 年（2011 年）度、平成 24 年（2012 年）度、平成 25 年（2013 年）度、平成 26 年（2014 年）度の学生アンケート及び感想は、事前に、今後の授業に生かすための調査・研究に使用するとの了承を得ている。又、平成 29 年度（2017 年）度も同様である。
更に写真の掲載については、論文作成以前に一人ずつ了承を取っている。

引用文献、参考資料

１）新村出　(2008)「広辞苑」岩波書店 pp.636 ISBN978-4-00-080122
２）幼保連携型認定こども園教育・保育要領・幼稚園教育要領・保育所保育指針〈原本〉（2015）　チャイルド本社 ISBN978-4-8054-0228-3
３）一般社団法人　保育教諭養成課程研究会（2017）　pp.19
４）日本音楽教育学会設立 40 周年記念論文集 日本音楽教育学会　編（2009）「音楽教育学の未来」ISBN978-4-276-3110-9-1 C1073
５）瀬川祐司　(2014)「『サウンド・オブ・ミュージック』の秘密」平凡新書　ISBN978-4-582-85759-7 C0274
６）本橋哲也　(2011)「深読みミュージカル」青土社　ISBN978-4-7917-6624-6 C0074
７）Patricia Sheban Campbell and Carol Scotto-

Kassner （2010）「Music in Childhood」SCHIRMER
8）佐藤倫子 （2007）「表現の創出過程とその総合性に関する一考察―「総合表現演出」の授業実践の分析をもとに―」岡山大学教育実践総合センター紀要、第7巻
9）木村正邦 （2004）「ミュージカル研究 ―サウンド・オブ・ミュージックを中心に―」鳴門教育大学研究紀要、第19巻
10）寺岡真知子・松田由理子・野崎剛毅・黒坂陽一 （2008）「保育士養成課程における保育内容の研究「総合表現」授業実践に関する一考察」 国学院短期大学紀要　第25巻

落合知美 （埼玉東萌短期大学教授）